

# 和泉式部と帥宮敦道親王

—寛弘元年の二人—

森 田 兼 吉

和泉式部が帥宮敦道親王の居所東三条院南院に迎え入れられたのは、『和泉式部日記』によれば、長保五年（一〇〇三）十二月十八日であった。翌長保六年（七月二十日）に改元されて寛弘元年となる（のおそらくは正月、敦道親王の妃藤原清時の中の君は里邸に戻ってしまいが、この年は和泉式部と敦道親王の二人にとつて、さまざまなことが起こった、あるいはさまざまな事件を起こした年であった。白河への花見、式部の夫であった橘道貞とその妻子の陸奥国下向、二人一ツ車での賀茂の祭見物など、和泉式部について語るときよく引かれるこれらの出来事には、また明確にされていない点も多く、誤認のままに語られる例も多い。今この年の二人に関わる出来事について若干の考察を試み、和泉式部召人説にまで論及して、二人の関係を明らかにするようにつとめたい。

帥宮と和泉式部との白河の花見は、『和泉式部集』（正集）や藤原公任の家集に伝えられている。『和泉式部集』中のもので、清水文雄氏の『尊和和泉式部集（正・統）』（笠間書院）によつて示そう。

和泉式部と帥宮敦道親王 —寛弘元年の二人—

数字は同書の歌番号である。

いづれのみやにかおほしけむ、白河院にまろもろともにおはして、かくかきていへもりにとらせておほしぬ。

99 われが名は花ぬす人とたたばただ一枝はをりてかへらむ

日ごろみて、をりて、さゑもんのかみ返し

100 山里のぬしにしられでをる人は花をも名をもしまざりけれ

とあるふみをつけたる花のいとおもしろきを、まろが口

すさびにうちいひし

101 をる人のそれなるからにあぢきなくみし山里の花の香ぞする

さゑもんのかみの返事、又、宮せさせ給ふ

102 しられぬぞかひなかりけるあかざりし花にかへつる身をばを

します

又、さゑもんのかみ、

103 人しれぬ心のうちをしりぬれば花のあたりに春はすぐさん

一日、御ふみつけたりし花をみて、まろなんさいひしと

人のかたりければ、かくぞのたまひし

104 しろらめやその山里の花の香はなべての袖にうつりやはする  
返し

105 しろれじとそこらかすみへのだててに尋ねて花の色は見てし  
を

又、さゑもんのかみ、みちのくのかみのくだりしころ、  
それにうちそへたることぞみし

106 今更にかすみのとづる白河の関をしひてはたづぬべしやは  
まろ、かへし

107 ゆく春のとめまほしきに白川の関をこえぬる身ともなるかな  
『大納言公任集』のものも『私家集大成』所収本によつて引いて  
おく(以下『和泉式部集』以外の私家集は『私家集大成』による)。

そちの宮、花みにしら川におはして

29 われか名は花ぬす人とたゝはたて たた一枝はおりてかへら  
ん

とありければ

30 山里のぬしにしらせておる人は 花をも名をもをしまさりけ  
り

また、宮より

31 しろれぬそかひなかりけるあかさしし 花にかへてし名をは  
をします

かへし

32 人しれぬ心のほとをしりぬれば 花のあたりに春はすまはん  
花をも名をもときくにたまへりけるおほん返りにつけ

て、みちさためのみきこえける

33 おる人のそれなるからにあちきなく みし山里の花のかそす  
る

また、きこえたりける

34 しろせしと花に霞のへたてしを 尋ねて花の色もみてし  
かへし

35 今さらに霞とちたるしら川の 関をしるては尋ねへしやは

『和泉式部集』では「いづれのみやにかおはしけむ」とおぼろに  
記されているが、帥宮であることは『大納言公任集』によつても明  
らかである。そして106の詞書によつて、この花見が橘道員の陸奥國  
に下向した頃のものだとわかる。周知のように、道貞の下向は『御  
堂関白記』寛弘元年三月十八日の条に、

陸奥守道貞申<sub>三</sub>赴任由。賜<sub>三</sub>盃酌<sub>一</sub>。次有<sub>三</sub>和奇事<sub>一</sub>。賜<sub>三</sub>直装

束・野劍・胡録<sub>一</sub>・弓・馬・鞍等。

とあり、同二十一日の条に「道貞朝臣許平緒一条・色革百枚送之」  
とも見え、出立は二十一日かその直後の日のことと思われる。

ところで、この年の三月二十八日には、帥宮の異母兄花山院も白  
河に花見に出かけている。『御堂関白記』には、

從<sub>三</sub>華山院<sub>一</sub>、右近中将公信朝臣来云、仰事、可<sub>三</sub>花御覽參者。

只今<sub>甲</sub>參由、即參入。從<sub>三</sub>兼有<sub>三</sub>此聞<sub>一</sub>。仍非<sub>三</sub>無其意用<sub>一</sub>、召<sub>三</sub>余車<sub>一</sub>

御。即候<sub>三</sub>御車<sub>一</sub>。覽<sub>三</sub>白河殿<sub>一</sub>。後從<sub>三</sub>山辺<sub>一</sub>御<sub>三</sub>御馬<sub>一</sub>。御<sub>三</sub>觀

音<sub>一</sub>。勝筭。余所<sub>三</sub>儲御前物并破子<sub>一</sub>、於<sub>三</sub>彼房<sub>一</sub>供。仰<sub>三</sub>左衛門督

令<sub>三</sub>和哥題<sub>一</sub>二音料。帰院給後、奉<sub>三</sub>哥<sub>一</sub>有<sub>三</sub>御製<sub>一</sub>賜<sub>三</sub>之<sub>一</sub>。後退出間、

賜<sub>三</sub>御馬<sub>一</sub>。依<sub>三</sub>乘車<sub>一</sub>後<sub>三</sub>無<sub>三</sub>拜<sub>一</sub>。

とある。「兼ねてより聞え有り」とはいえ、急な企てである。藤原

行成も召されたが、産穢のためと辞退した。行成は「権記」に「今日院御覽花、有御幸」。左大臣扈從。自余公卿及侍臣有其數云々」とも記し、かなり大がかりな御幸であった。

この年の三月二十八日は、太陽曆（ユリウス曆）では四月二十日にあたる（日本曆日原典）。かなりおそい花見であった。実際「藤原長能集」に、

花山院、三月二十八日、花御覽しにありかせ給ふ御とも  
にさふらひて、尋残花といふ題を

78 たにかせにみやまのはなやのこりあると うちそわたれるみ  
つもさはくに

とあるのによれば、公任の奉った歌題の一つが「尋残花」で、長能の歌から見ても、白河の花はすでに散っており、深山（石蔵の觀音院の辺）に尋ね入ったのであろう。こんな時期に花山院はなぜ白河に花見に行ったのであろうか。それには帥宮と和泉式部の白河の花見がきっかけになったと推定してよいだろう。院は帥宮から、公任との和歌の贈答のエピソードをも含めて、式部と同行した花見の模様を聞き、おそい花見を思い立ったのであろう。それでなくても、帥宮と式部の、おそらくは同車しての花見は、京雀達のかっこうの話題だったはずである。それを意識せずに、白河に花見に行くことはまず考えられないのである。花山院の花見は、後に記す賀茂の祭見物と共に、院と帥宮の接近を語るものであり、と同時に、院の和泉式部という女姓への関心をもうかがわせる。

ところで、帥宮と式部が白河を訪れた時は花の盛りであった。三月二十八日が残んの花を尋ねという状態であったことからすれば、

和泉式部と帥宮敦道親王 一寛弘元年の二人

二人の白河行きはその十日前後ぐらい前ということになるか。道貞が道長に陸奥国赴任のいとま乞いに行った三月の十八日にきわめて近い日のことであった。

帥宮が和泉式部と白河院を訪うたとき、主の公任はこの山荘にはいなかった。おそらくは不意の訪問だったのであろう。それで、帥宮は、

われが名は花盗人と立たば立てただ一枝は折りて帰らん  
という歌を家守一家の留守をあずかっている者に託したのである。

この家守について、日本古典全書「和泉式部集」の頭注のように「院の監督者藤原公任」とする説があり、小松登美氏らの「和泉式部集全釈」が希観本になってしまったためか、最近でも「折ふし公任は皇室料白河院の管理を委されていたが」と書かれたりするが、公任の山荘が白河にあったことはよく知られており、はやく後藤丹治氏に詳細な論もある。それに、皇室御領として著名な白河院は、「法勝寺金堂造営記」に「件所故宇治前大相国累代之別業也。左大臣伝領被<sub>レ</sub>献<sub>ニ</sub>公家<sub>一</sub>也」とあるように、左大臣師実によって白河天皇に献上されたもので、後代の成立であった。

「花盗人」ということは、散文では「枕草子」に一例が見られるものの、和歌に使われることはめつたになく、目につくものであった。そしてそれは、諸家が述べているように、和泉式部を手中にした帥宮の行為をも連想させずにはおかない。花見の途次公任の山荘を、多分主人が本邸にあって不在であることを知りながらこっそりに訪い、しかもこのような歌を家守に託したことは、和泉式部を伴って花見に来たことを、公任に、あるいは公任を通して貴族社会

全体に、誇示することにほかならないのである。

100の詞書の「日ごろみて」は、こう読んでは、帥宮達が数日花を見てとか、公任が帥宮歌を数日間も見ていてとか解するほかないが、前者では後文と続かないし、いくら苦吟したとしても後者もおかしい。「をりて」も「折りて」ではなく「日ごろ見でをりて」と読まねばならない。家守の気がきかなかつたためか、公任は何日間かその歌を見ずについて、数日後にやつと返歌が来たのである。儀礼的な公任の歌に対する帥宮の返歌の上一句「しられぬぞかひなかりける」には、自分の行為がすぐに知られなかつた残念さが詠み込まれている。であるからこそ、これに対する公任の返歌が「花のあたりに春はすぐさん」となっているのである。「宮に引かれて私も花のあたりで春を過しませう」でも、公任の集の「春は住まはん」によつた大岡信氏の「私も宮に追隨して、この花のほとりに今年の春をすぐすことにします」やその別解の「今年の『春』は、この白河の花のあたりにこそとどまり任んでいることでしょう」でも、宮の歌とうまく続かない。榊原本などの「春はすぐとも」では解釈ができない。帥宮の無念の思いを受けて、(そんな失礼のないよう)これからは花のあたり(山荘)で春を過すことにしましょう、と解すべきであろう。

この歌群でもう一つ注目しなければならぬのは、帥宮と公任との贈答に式部が入り込んでいることである。公任が文をつけて送つて来た花の枝の見事さに、式部が10の歌を口ずさんだのだという。この歌の「をる人」には、「折る人」と「居る人」がかけられているのであろう。この枝を折った人が公任様で、それにあのととき花見に

連れて行つてくださった宮様もここにおられる。それでただ一枝の花なのに「みし山里の花の香ぞする」とつながるのである。

和泉式部の歌には「あぢきなく」が第三句に使われている。やや難解視されているが、第三句に「あぢきなく」の置かれている歌を『和泉式部集』から順次四首抜いてみると、

564 待つ人はまでもみえであぢきなくまたぬ人こそまづはみえ  
けれ

582 まつ人はゆきとまりつあぢきなく年のみこゆるよさの大山  
742 身のうきにひけるあやめあぢきなく人の袖までねをやかく  
べき

756 われのみやおもひおこせむあぢきなく人はゆくへもしらぬも  
のゆる

というように、下二句で詠みあげる、主として思いがけない成り行きを、つまらない、不満だがどうしようもないと嘆じているのが普通である。この歌の場合もそうで、「をる人」が「をる人」だからこそ「みし山里の花の香」がしたはずなのに、そういう結果を予想外の「あぢきなく」のことばで評価しているところがみそである。なぜ、「あぢきなく」なのか。全釈は「さう簡単にける山里ではないのに、こんな美しい花を見ると、又ゆきたくて、かへつてあぢけない思ひがする」、篠塚純子氏は、「今、ここで咲いているかのように新鮮で素晴らしい香りがする。だから、かえつて、つまらないような気がしますわ。あの山里で咲いている桜をその場で見ただからこそ風情があるのだと思つていましたのに」と解される。が、「折る人」に「居る人」——帥宮の存在を重ねて考えてみると、いささか

違つて読めて来る。帥宮と共に花を見て過ごしたあの日。二度と訪れることがあるとは思えぬ、すばらしいあの日の花の美しさが、まざまざとよみがえつて来るようで、その不意の、あつけない再現に、当惑し、むしろ「あぢきなく」感じてしまうのである。「あぢきなく」と表現することによって、逆に、帥宮故にあの日がどんなにすばらしく、共に見た花がどれほど美しかったかが強調されている。花の贈り主公任へのあいさつの歌である以上に、そこにいる帥宮へのあいさつなのである。

「まろなんさいひしと、人のかたりければ」という104の詠者を、大岡氏は帥宮と見、公任の集との相違を指摘される。104が帥宮の作であれば、式部が「をる人の」の歌を口ずさんだとき宮はそこにいなかったことになり、右のような私解は成立しない。大岡氏は、104の詞書の「かくそのたまひし」という敬語の使用から、「のたまひし」の主格を帥宮と判断されたのだが、公任の集のように公任と考えた方が自然である。「和泉式部集」(正集)の詞書の敬語については小松登美氏に詳細な御調査があるが、左衛門督公任に敬語「のたまふ」を用いてもけつしておかしくはない。公任から式部へあてた106の詞書に「又、さゑもんのかみ」とあるのは、式部あての歌が前にあつてこそその表現であり、「和泉式部集」でも104を公任の作として扱っていることは確かである。

式部の101は、公任への歌として詠まれたものではなかった。従つて公任への返歌として贈られたのは帥宮の102だけであつた。それを、歌に公任へのあいさつも含まれているものだから、公任にわざわざ告げたものがあつて、式部と公任との贈答となつたのである。

式部の和歌には衆人の関心があつたのであろう。しかし、と同時に、公任の集にはまだ「みちさだめ」として扱われているものの、帥宮に深くかかわる存在として式部を遇していた者が宮と式部の近くにあつたことをも示しているであらう。

## 二

公任から道員の陸奥国下向にからめた歌を贈られたことよつて詠まれた「ゆく春のとめまじきに」の歌には、式部の道員への思いが掘り起こされている。前年の秋は、

道員さりてのち、帥の宮に参りぬと聞きて、

赤染衛門

365 うつろはでしばし信田の森をみよかへりもぞする葛のうら風返し

366 秋風はずごく吹くとも葛の葉のうらみかほにはみえじとぞおもふ

と、道員の戻つて来るまで心を移さず待てという注告に対して「うらみがほにはみえじとぞおもふ」と強気で答えていたのだが、道員が都を離れるとなると、身は帥宮の南院にありながらも、なお式部の心は揺れるのであつた。

みちのくにの守にてたつをききて

847 もろともたたまし物をみちのくの衣の関をよそにきくかなや、赤染の「ゆく人もとまるもいかに思ふらんわかれてのちのまたのわかれを」に答えた、

184 わかれてもおなじみやこにありしかばいとこのたびの心ちや  
はせし

などについては、ここに言うまでもない。

道貞が式部から去った理由については彈王宮との恋愛事件により、「道貞が怒って彼女と断ち」というように式部の側の責任を考へる旧来の見方に対して、岡一男氏<sup>(1)</sup>あたりから道貞の女性関係にも責任があるという見方が出され、有力になって来た。道貞の女性関係についてここで考へてみたい。

この年の閏九月十六日、道貞の妻子が、小雨の中を陸奥国に下つて行った。

陸奥守道貞朝臣妾子下向。自装束并女騎装束・馬・鞍等、以三  
安隆朝臣二送遣。有<sub>二</sub>和哥<sub>一</sub>。

と『御堂関白記』に見える。道貞とこの女との間には、陸奥国への長旅に耐えうるほどになった子どもがいたことになる。

同じ『御堂関白記』の長和五年（一〇一六）の四月十八日の条に、道貞の死を伝える、

資業申云、舅道貞今朝死去者。

という記事がある。これによれば、道貞の娘が資業の妻になっていたのである。資業は藤原有国の息で、永延二年の生まれで長和五年当時二十九歳であった。『尊卑分脈』に見える資業の子六十人のうち三人には母の素姓が示されているものの、そこには道貞女はなく、資業の妻である道貞女の年齢を知る手がかりは今のところない。ただ資業の妻であるから十五歳以上になっていることは確かであろう。十五歳とすれば長保四年（一〇〇二）の生まれ、二十歳とすれ

ば長徳三年（九九七）の誕生ということになる。その母との道貞のかかわりはさらに一年以上早くからなるから、おそらく長保元年（九九九）頃には二人の関係は生じていたと考へるのが妥当であろう。彈正宮と式部との恋愛よりも早いと思われる。

閏九月に陸奥国に下向した道貞の妻は、旅の途次尾張国で、尾張守である夫大江匡衡と共に夫の任国に住まっていた赤染衛門と歌の贈答をしている。『赤染衛門集』（流布本系）を見よう。下向の途次立ち寄った道貞との贈答歌に続いて、次のようにある。

一条院にさぶらひし左京の命婦、いつみのかみのめにて  
くたるかいひたる

187 都路の心もしるくしほりして 君たにあるとおもふみち哉

返し

188 しほるともたれかおもひし山みちに 君しも跡を尋けるかな

又これより、いかでみづからなどいひて

189 あはしてふみちにたにこそあふと聞 たくにてすきん人のつ  
らさよ

返し、命婦

190 山をたに思ひへたてぬ道なれば これよりすきん心ちやはす  
る

「いつみのかみ」とは、陸奥守道貞を古い定着した国名で記した  
までであろう。『紫式部日記』には、本来は一条天皇の女房で中宮  
彰子付きをも兼ねている五人の中に、「左京」（日本古典文学全集  
P193）「左京の命婦」（P195）と呼ばれる女房が出て来る。この  
赤染衛門の集に見える「一条院にさぶらひし左京の命婦」と同人と

思われる。左京の命婦と道貞との関係は、早く岡氏も指摘しておられる。ところが「紫式部日記」の研究の中では、岩野祐吉氏がこの赤染の集の和泉守を、「御堂関白記」寛弘元年十一月九日の条に見える「和泉守脩政」と推定して以来、全注釈が全面的にこれを認め、日本古典文学大系・日本古典文学全集・新潮日本古典集成などの主要諸注釈は、いずれもこの左京を藤原脩政の妻かとしている。しかし少しでもまともに「赤染衛門集」を読みさえすれば、そのような説の成立する余地のないことは明白である。和泉守の妻として和泉国へ下る女性が反対方向の尾張国まで来るはずはないのである。尾張の赤染と京の和泉式部との間に交わされたような、遠く離れた者同士の間答でないことは、189・190がはっきり語っている。189の「あはじ」には「淡路」ではなく、陸奥国への方角にある「安房路」に、「逢はじ」がかけてあるのであろう。この二首の解釈を念のために記しておく。

また、わたくしの方から、「どうして御自身で寄ってくだらないの」などといって、「逢はじ」という名を持つ、あなたの行かれる安房への路でだつて、人は逢うものだといっていますのに、素通りなさろうなんて、あなたはなんて薄情なのでしょう。

返し、命婦

あなたとの間には何の隔て心もございません。それに、今二人の間は山も隔てぬ近さなのですから、このままお逢いせずに通り過ぎようなんて気持がするものですか。

この左京と筑前の二人の命婦の髪上げ姿を「紫式部日記」は、

和泉式部と帥宮敦道親王 — 寛弘元年の二人 —

「これはよろしき天女なり」と書いている。寛弘五年（一〇〇八）当時左京はかなりの年配だったのであろう。この左京の名は、すでに「権記」の長保元年（九九九）七月二十一日の条に内裏女房として見えている。道貞との仲をあまりおそく考えない方がよいであらう。

もちろん、一人の男が何人もの妻を持ってもおかしくない時代であった。左京と道貞との関係が、式部と道貞との仲を破局に導いたなどと軽々にいうことはできない。ただ、和泉式部が道貞との結婚生活の中で、夫の愛を独占できず、充たされぬ思いに苦しみ悩んだことだけは確かであらう。それに道貞は多情であった。「玄々集」に「前斎院兵庫、陸奥守みちさたか、かよひける、かれくになりて後、かたのゝ馬の、はなれたりければ、とりてやるとて」の詞書で一首を載せる交野の女との交情は、式部と別れる前か後かよくわからないが、「和泉式部集」（統集）の、

1155 をとこのもとに、女の返事のふたつみつあるを見てやる  
はしほしをとふみかくふみふみみればただ身のうきにわたす  
なりけり

の歌の詞書の「をとこ」は、全釈も説くように夫らしく、岡一男氏が道貞とされたのは従うべきであらう。それはともかくとしても、式部は、丁度よい便があったからであらうが、

陸奥国へいひやる

910 たかかりしなみによそへてその国にありてふ山をいかにみる  
らむ

という歌を道貞に贈っている。自分は今帥宮と一緒に住んでいるの

だから、道貞によほどの多情の事実がなかったならば、わざわざこのような歌は贈れまい。

道貞の方から去って行ったことは、先に引いた赤染の歌の「かへりもぞする葛のうら風」からもわかる。夫婦別れの真の原因など所詮わかりはしないのだが、和泉が男を嫌って別れたわけではなかった。結婚生活の中で味わった充たされぬ思い、愛情への飢えは、不本意な別れによって一層増幅されたであろう。生涯、さまざま折に掘り起こされ、燃えた道貞への思いは、こうした結婚生活と別れとに深くかかわっていると考えられる。

『和泉式部日記』に見られるような、鋭敏で女の心の動きにたえず気をつかっている帥宮には、道貞下向の頃の式部の心の揺れは当然察せられたであろう。若い帥宮にそれが不快でなかったはずはない。女の心を慰さめ、おのが一人のものとする試みの一つとして、白河の花見も行われたのではなからうか。

### 三

和泉式部と帥宮とにかかわるエピソードとして、古来最も知られているのは、賀茂の祭見物である。まず『栄花物語』の描くところを見よう。引用は『栄花物語全注釈』による。

今年はこの使のひびきにて、帥の宮・花山院など、わざと御車したてて物を御覧じ、御棧敷の前、あまた度渡らせ給ふ。帥の宮の御車のしりには、和泉を乗せさせ給へり。花山院の御車は、<sup>きん</sup>さんの漆などいふやうに塗らせ給へり。網代の御車をすべてえもいはず造らせ給へり。「さはかうもすべかりけり」と見え

たり。御供に大童子の大きやかに年ねびたる四十人、中童子廿人、召次ばら、もとの俗ども仕うまつれり。御車のしりに殿上人引き連れて、色色さまざまにて、赤き扇をひろめかし使ひて、御棧敷の前あまた度渡り歩かせ給ふ程、ただの年ならば「かからでも」など、殿見奉らせ給つべけれど、使の君の御ものの榮に思ほされて、上達部うち頬笑み、殿の御前、「なほけしきおはします院なりかしな。この男の使に立つ年「我こそ見はやさめ」と宣はずと聞きしもしるく、ゆくりかにも出で給へるかな」と、皆興じきこえ給ふ。(はつはな)

『大鏡』には(日本古典文学全集による)

この春宮の御弟の宮たちは、少し軽々にぞおはしましたし。帥の宮の、祭のかへき、和泉式部の君とあひ乗らせたまひて、御覧ぜしさまも、いと興ありきやな。御車の口の簾を中より切らせたまひて、わが御方をば高う上げさせたまひ、式部の乗りたる方をばおろして、衣ながう出させて、紅の袴に赤き色紙の物忌いとひろきつけて、地とひとしうさげられたりしかば、いかにぞ、物見よりは、それをこそ人見るめりしか。(兼家伝)

この都人の耳目を驚かした二人一つ車での祭見物はいつのことなのか。『栄花物語』は寛弘二年(一〇〇五)に設定する。今年の祭の使(勅使)には道長の子頼通が決まり、花山院や帥宮の度を過ぎた風流・風狂は「この使のひびき」であり、見はやす行為だとしているのである。しかし、はやく岡田希雄氏によって指摘されたように「御堂閨白記」「権記」などによれば寛弘二年の祭の使は頼通ではなく、源雅通であった。そこで岡田氏は、「権記」の寛弘元年の



四月二十日の条に、「中将為<sup>ニ</sup>祭使<sup>一</sup>」とある中将を頼通かと考え、祭の使の記事をも含めて寛弘元年の誤りとされたのである。もっとも寛弘元年の祭の使も頼通ではなかった。「権記」の祭の使に触れた部分は、

詣<sup>ニ</sup>枇杷殿<sup>一</sup>。候御供<sup>一</sup>。於<sup>ニ</sup>一条大納言殿北門<sup>一</sup>見物。事与<sup>ニ</sup>近江守知章朝臣同載帰<sup>一</sup>。式部卿宮中将為<sup>ニ</sup>祭使<sup>一</sup>。奉<sup>ニ</sup>摺袴<sup>一</sup>。昨日雖有<sup>ニ</sup>官御消息<sup>一</sup>不<sup>ニ</sup>参入<sup>一</sup>。

とあって、岡田氏は式部卿宮の次に詭点を打って引かれたが、増補史料大成本のように続けて読むべきで、式部卿宮の中将、すなわち村上天皇の皇子式部卿宮為平親王の子の左近中将頼定であった（頼定は「公卿補任」寛弘六年の条によれば、長保三年八月に左近中将になっている）。

結局岡田説は論拠の半分を失うわけで、そのためか「栄花物語」どおり寛弘二年のこととして扱われることも現在もよくあるが、岡田氏の寛弘二年への疑点はそのままでますますわけにはいかないはずである。<sup>15</sup>

山中裕氏<sup>16</sup>は、頼通の祭の使は寛弘元年の祭の使の誤ったものとききれ——これは前述のように誤認である——しかしそれは無意識の誤りではなく、他の、事実とは相違して道長が主役になっている幾つかの点と共に「作者はすべて大きな事件は道長に結びつけんとしたため」と想定された。松村博司氏もそれを全面的に認め、補強しておられる（全注釈）。帥宮や花山院の行為が頼通の祭の使と結びつけて語られているのは、作者のそうした道長強調の方法と深くかかわっているわけで、「栄花物語」の寛弘二年という設定は、二重に

和泉式部と帥宮教道親王——寛弘元年の二人——

信頼性が疑われることになる。

では、いつのことか。

寛弘元年から四年までの四年のうちであることは確かだが、それ以上つめる客観的な資料はない。しかし、寛弘元年の三月の白河の花見と、賀茂のこの祭見物とは類似の性格をもつ事件であり、帥宮が式部を迎えて最もその心が高潮していたであろう寛弘元年を考え、その妥当ではなかるうか。それに寛弘元年の祭の使は前述のように頼定であった。頼定の父為平親王は帥宮と花山院の父冷泉院の弟であり、つまり、帥宮と院のいことが祭使に立っていたのである。頼定は当時二十八歳。清少納言が「枕草子」で大鼓判を押した美青年で、東宮妃媛子に密通して懐妊させた話（大鏡）はかなり弘まっていたらう。その媛子はこの年二月七日に病死した（御堂関白記他）ばかりで、見物衆の話題にこと欠かない。帥宮や花山院が、見はやすくにはまさにうつつけの祭使なのである。

この祭見物で、帥宮と花山院が行動を共にしているのは注目してよい。白河の花見でも院との接触は察せられた。帥宮の兄彈正宮は早くから家を出て、花山院と暮らし、その仲立ちで、院が関係を持っていた伊尹の九の君を妻に迎えた。<sup>16</sup>帥宮は終始兼家——道隆——道長と伝領された東三条院の南院に住し、摂関家の庇護下ないしは束縛下に、優等生的な生活を送っていたようだが、式部を迎え、花山院に接近して行ったことは、生きる姿勢の変革につながるのである。

四

『和泉式部集』（正集）に、

十月ばかり、そちのみやより、「いかにつれづれに」と  
のたまへれば

233 はなみにとくらししときは春の日もいとかくながき心ちやは  
せし

という歌がある。花を見て暮の日の長さも感じなかったときは、『和泉式部集全釈』も指摘しているように、白河の花見を頭においている表現であろう。寛弘元年の十月頃の作と考えられる。ただ、全釈は、「まだ一度も共に紅葉を見にさへゆけない淋しさを、末句が、それとなく訴へてゐる」というように解しているのだが、「いかにつれづれに」という宮の問いかけは、式部が「つれづれ」であることを前程としたものであり、『和泉式部日記』の帥宮の消息にしばしば見える問いかけであった。宮と式部が別々に生活しているときの問いかけであり、歌であるとするのが自然であろう。式部が帥宮の御子を生み、それが『本朝皇胤紹運録』に宮の子として記載されている永覚であることは、和泉式部伝ではほぼ定説になっている。その出産のため式部はある期間宮邸を離れていたはずで、この歌はその期間の作ではなからうか。とすれば、式部が帥宮の御子を出産したのは、寛弘元年の末か二年の春ということになる。

五

この時代の貴族の屋敷に、妻妾という意識が自分にも周囲にもな

く、そう扱われてもいないが、主人と肉体的関係を持っている女房がいて、「召人」と呼ばれていたという。その実態を詳らかにし、帥宮と式部との関係にその概念をあてはめて考えうとされたのは、阿部秋生氏であった。以後、諸家の和泉式部研究・和泉式部論の多くは、召人ということばや概念を積極的に取り入れている。阿部氏が物語類などから整理された「召人」の性格は、

- (1) 女の方は、男の家又はそれに準ずる家の女房である。
- (2) 男女相互の愛情関係を基礎にして始まるものである。
- (3) 事実上妻と同様であるが、女房であることに変りはないから、肩住居をしてゐる。又妻のやうに家政を支配することは勿論、妻の如き待遇を求めることはできない。
- (4) 社会的に公認されてゐる男女関係ではない。人目を忍んでの關係であるから、けしからぬことであり、殊に北の方格の女性のある家庭内では、非難されてもやむをえない。
- (5) 北の方格の人は、夫に、かういふ關係の生じた時、それを一々目に角立てることはよくないとされてゐた。やむをえない愛情關係として、黙認する方がいと考へられてゐたらしい。
- (6) 誰が召人であるかは、外部の者にも知られてゐたが、そのことにはふれないといふのが常識であつたやうである。
- (7) 結婚の前段階として男性がその女性の家を訪れて妻問をするのが普通であるが、召人の場合にはこの手続きは省略されて

ゐたやうである。

(8) 受領・諸大夫の娘で、撰閑家の妻といつて然るべき地位を占めた女性には子供があるが、召人には子供が生まれてゐないやうである。

阿部氏自身「和泉式部の場合は、今までみて来た召人の場合と違った条件がある」としておられるが、この八項目を通覧するとき、むしろ、帥宮と式部との関係が多くの項目で説かれるところと合致していないことにまず気づくのである。項目ごとに関連点を簡単に記してみよう。

(1) 式部は確かに女房として宮邸に入ったが、宮との関係の生じたときには宮家の女房ではなかった。

(2) 式部が終始局住居をしていたかは疑問。

(3) 宮邸に式部が入るまでは人目を忍ぶ関係であったが、その後にはむしろ積極的に二人の関係は誇示されている。

(4) 北の方は怒って実家に帰り、戻って来ることはなかった。

(5) 宮と式部の関係については、ああ誇示されている以上、多くの人の話題になつたはずである。

(7) 帥宮は「和泉式部日記」に見られるようにしばしば式部のもとを訪れ、また、多くの恋歌の贈答があつた。妻問と區別しなくい。

(8) 式部は帥宮の御子を生んでいる。

以上のように、帥宮と式部との関係は、いわゆる召人の性格とは合致しない点が多いのである。

式部が帥宮邸に入ったとき、女房という立場であつたことは、む

和泉式部と帥宮敦道親王 — 寛弘元年の二人 —

ろん確かである。「和泉式部日記」で帥宮は、北の方に、

…御気色あしきにしたがひて、中将などがにくげに思ひたるむつかしきに、頭かみなどもけづらせむとてよびたるなり。こなたな  
ども召しつかはせたまへかし。(日本古典文学全集P147)

と言いつくろつてゐる。当然女房名も必要だつたわけで、宮邸では「式部」と呼ばれていたであろう。彼女が和泉式部という「和泉」にせよ「式部」にせよ、それだけで女房名たりうるものを二つ合わせて呼称としているのは、最初の宮仕えでおそらくは父の職名によって式部と呼ばれ、道貞と結婚後、式部という女房名は多いので區別するため、夫の国名を冠せられたのだと、わたくしは考へている。

和泉式部という呼称は最初の宮仕え時代に成立してゐたのではないかと思ふが、帥宮邸では「和泉」という語は避けられたであろう。

式部の道貞への思いを感じ取つてゐる帥宮にとつて、和泉という呼称は歓迎されるものではなかった。式部の代表歌と目される「暗き

より暗き道にぞ入りぬべきはるかに照らせ山の端の月」は、帥宮と

の恋愛の中で生まれ、<sup>(18)</sup> 乾山院によつて『拾遺集』に採録されたものであるが、その作者名表記は、片桐洋一氏の「拾遺和歌集の研究本文篇」によれば、藤原定家書写本系統と異本第一系統の諸本に共通して「雅致女式部」、異本第二系統の京都北野天満宮本で「雅致

むすめ」である。「和泉式部」としないのは、帥宮邸での呼称が式部だけであつたし、帥宮の心情を忖度したからであろう。

式部は女房という形で宮邸に迎えられたのだが、そう取りつくりわれたというので、並の女房の扱ひではなかった。宮邸入り直後、

今かの北の方にわたしたてまつらむ。ここは近ければゆかしげなし。(P 146)

と帥宮は式部に語っているし、「二日ばかりありて北の対にわたらせたまふべければ」という文もすぐに続く。それでも、

かくて日ごろふれば、さぶらひつきて、昼なども上にさぶらひて、御ぐしなども参り、よろづにつかはせたまふ。(P 148)

と女房の仕事もしている。そして、北の方がたまりかねて里へ戻ってからはどうであつたらうか。白河の花見に伴つたのも、同車を

誇示して賀茂の祭を見たのも、本稿で考察した諸点は、けつして女房の、召人の待遇ではなかつた。嵯峨での生活も一緒で、寛弘四年(1007)十月二日に帥宮が薨ずるまで二人の愛情生活は全うさ

れたと見られる。そして百二十余首の挽歌が語るように、式部は一年間の喪に服したのである。その挽歌の中に、

。つかはせ給ひし御すずりを、おなじ所にてみし人のこひたる、  
やるとて  
おほんしうづ

。「御おほんしうづ 襪のありし、みあはずべきことなんあり」とて人のこひたる、やらんとともとむるになければ (1006)

という詞書を持つものもあるのによれば、式部は帥宮の遺品の保持者・管理者とも目ざされていたらしい。傳の殿(道細)に

235 さる目みて世にあらじとやおもふらんあはれをしれる人のと  
はぬは

と申問するのが当然という歌を贈りもする。妻妾でもあり、女房のように身の回りの世話をする存在でもありとおしたろうが、召人の概念では表わしえない間柄だったのである。

注1 「の」字、底本にない。誤脱と考えて補った。

2 四字、大成は「すまさん」だが、榊原本・類従本によって改めた。

3 大日本古記録による。「権記」は増補史料大成により、共に返り点を付した。

4 馬場あき子 『和泉式部』 三の8  
5 枕草子「小白河」の再検討 —— 小林氏の北白河誤写説を讀みて —— (国語国文 昭8・2)

6 日本古典全書 『和泉式部集』  
7 公子と浮かれ女(うたげと孤心(三)) (すばる 14 昭和48・12) 後「うたげと孤心」所収。

8 「和泉式部 いのちの歌」  
9 「和泉式部正集」詞書の敬語について(「馬淵和夫博士退官記念 国語学論集」)

10 与謝野晶子 日本古典全集 『和泉式部全集』 解題  
11 「源氏物語の基礎的研究」 第二部二の(5)

12 新訂増補国史大系「尊卑分脈」二 P 202 (頭注も参照)  
13 「紫式部日記人物考」

14 和泉式部伝の研究(三) (国語国文の研究 8 昭2・5)  
15 「歴史物語成立序説」 第三章第四節

16 森田 弾正官為尊親王伝考 (日本文学研究 14 昭53・11)  
17 「源氏物語研究序説」 第二篇第二章二

18・19 暗きより暗き道に —— 和泉式部と帥宮敦道親王 ——

「日記文学 作品論の試み」